W52—4
Y 64
3



臺北帝國大學
語學研究室
藏書印

林
大

67041

これ計りこのべ
これ毛だけもや
るかるがも
一羽くゝと
そて
くて
一條うを
いろ〳〵ふく
一統よを
一統匂を
くゝみの文字

一なろうと　ぴんとの者（もの）でいろうと
あろうが出（でー）来（き）ようが出来（でき）まいが
一尋（ひとひろ）なりと　たぐり寄（よ）せ
一云（いう）甲斐（かい）もなく　ぶりきやうみ
一出来（でき）次第（しだい）と　でまーしんだい
一皆（みな）様（さま）と　ごうんふさま海
一章（しょう）がめやまう　ぴぐぐあいも
一周章（しゅうしょう）と　ぶーやくや
一大略（たいりゃく）と　ぴいらく
一のみまと　ぴのつつも
一遂（とげ）べと　あそそもとぶ

ぐるぐると。あ
一散ふると。ぴ
一大事(だいじ)のひだ
しまい
一不通(ふつう)と。あ
一色(いろ)だたもう
いとうれ
一集(あつま)ふと。
ふ所(ところ)
一蘇生(よみがえり)と

一ぐうとい
一依怙贔負と
一贔負偏頗と
一偏執と
一奏言と
一前尾と
一染塵と
一飛染と
一投洋と
一起雲と
一変改と

一連署と　まんぢゃう
一連判と　まんだん
一起請　きしやう
一かうさつ
あまがさ
なしきこと
我々
と条々
一自由　じゆう
一不自由　ふじゆう
ともら

一狩人 もぐら
一狩人 無益と
なぜのよりから
薄情な 生捕て
そんならそうと
と恥ずかしそうに
砂をかけ
ふるえだよ
一助云々と

なでいふ別(ヅ)
一切(さい)の事(こと)を
仕(し)おほせ
一分別(えべつ)を
出(だ)す
一生念(しやうねん)を
立(たて)こめ
ては
ならぬ
ぞよ
活(いか)さう
ために
なつて
ゐる
と
云(いふ)
一焼元(おこりもと)を
死(しに)人を
出(だ)す

おびふうたう　あしたに死(しぬ)るものも
同(おなじ)ごとくれば湯桶(ゆとう)　こしだ
おいおとろへてしぬるものも
ごとく　同(おなじ)ごとくなり　拾(ひろ)ひて
公義(こうぎ)　文盲(もんもう)　菊蘭(きくらん)　無学(むがく)　錦絵(にしきえ)　死(し)
是(これ)ハよろこぶもの
一死骸(いちしがい)と　同(おなじ)ごとくなり
ろといふべし
一髑髏(いちどくろ)を　もてやりからべといふ
どくろ
一髑髏(いちどくろ)と

一ゆゑんと
一乱曲と
流いつく
一潔白と
るれ
一章句と
曲ゆゑんぶくめられてやがく
らふるとこころのくまよのあの
文字ゆゑんぶもんぐーと
もの心えんぐ動く文字まるうとや
ぐうんぐ

一ぢいう法物ゆるされたるとぶ
うぐめあうそうふらうもちよぐ
一亳光一孔ニ孔ニ孔と　ふぐんぷこう足
一滿遍と　ぶんぷこうと　ふぐんぷこう足
ぶんぐんこう平均乃義ありとそう
一數珠と　さらいせん
一聖靈と　ぶやうらい　往来云
一流薩埵と　ぶぐまうんぐよ
一愚癡業煞と　ぶらぐぐまひ
一光到と　ぶちやうそちやう
一即時と　ぶくぐぐらんぐ

ちやひきうすぐ
ぴらるふぁぱちやくとうこんのぐ
形とうすり
ふぁんとむ
うふぁんとむ
の物うれだいすきな
一相撲を
ぴとこうぱのせちこんのうつぼや
ふぁのせちこんのうつぼや
ぴとこうぱのせちこんのうつぼや
用ふぁ兵すきひうる
一舉ぬぐ
とうふぁんとむ

色ゆるふ
一家督と
一言途と
一延引と
一看過胡渦と
そひくんまて
名月なるや
重陽まてハ
渦なくとや
七夜外なること
り出てから

一無骨と　ぶこつ
一た禮と　ざれ

ぐっぱと。ちゃすぐぶっぷと
みよるべ
一気味(きみ)とうとべ
一憲(けんぐ)ぴを　ぷとび仏ふ芸(ぎ)も
くぐいぷ公(くぐ)ぴとみんぐらぐの
一天(てんぐ)を　そう
一脳(のぐ)にまてぐるちっぷ
むとみっ好ぷよ
てもうと
一晨(ちぐ)ぷと
とうってうぷれ

一地獄と　よぶ事同の時
地乃ぞくと　義義共不孝ふ
ゆゑハらゐまと　なづくるとそ
一餓死と　ぶ
一奔走と　う
一活計と　ぐらひけ
一寺院と　きんの
一早ト　ひぶ
一罪不盡と　ふじんつまり
一償と　あくん
一放逸と　まんぢ

一不圖と　ふ
気うてき
一龍文と　りゅうぶん
一生まるると　でき
一打意と　だいい
そうの
ふしあわせと
一枉惑と　おうわく
一定而と　さだめて
仮定　かてい
云ふ　いう

ぬりんこうと風ふれ叶ぬぢしも
さそでのりんとつよいふるつくの
ちまも
一たばでと　ぬつてと法はめり
ぬりしてゐん
一祖と　ぬたりしつみ
一懽會と　ぬつてゐんぐ
一活却と　ぬうゐやく
一耕と　ぬたりやそはめり
一筆耕と　ぬ
一老女と崩御と　ぬぐと

一就きては、おもふに、あだし
一際限と、ちんがらもひそ
一淵底と、えんてん
一傍らと、かーど
一島物と、しゃぶ
二時分と、もやう
一隆接と、もやうこと
一沈鬱と、おもんで
一未明を、えんめい
一就云々を、やんぬん

一歌と　のりものあそび
一絵もじを　づ、もじ
一是ゟ　こゝもと
一屋敷を　こゝもとやしきのひろひなど
一趣つゞき　きやうげんやまう。このゝち
なじ

一神通方角を　ぢんづうづく
一飛鳥数遣と　ぢやうきやうづく

但二ハ　ちぎあるれば
もくろみつゞきたれど

一真行草(しんぎやうさう)といふべき
ぞやうはやの。(ごとき)東坡文集(とうばぶんしう)曰(いはく)真(しん)生(せい)
行(ぎやう)々(〳〵)生(せい)草(さう)真(しん)如(ごとき)名之(これをなづく)行(ぎやう)如(ごとき)行(ぎやう)草(さう)ハ
如(ごとき)走(はしる)未(いまだ)有(あら)未(いまだ)能(よく)之(これ)能(よく)行(ゆく)而(して)能(よく)走(はしる)
ものハ(〳〵)

一戯場(しばゐ)と ここ(ゞ)ん。

一御同車(ごどうしや)と

一御同心(ごどうじん)と

一御自物(ごじぶつ)よ

めでたう

一途に迷ふと
一ぢやう迴路と
一まんだらぞ
一あひさ　右円
三界萬霊ごの廻向文とぶん
ま[illegible]いとはますずぶん
なるとうり。佛家
れむつてきのとうり。台家
浄家ふ云ふ。その
うり結ぶ

一ぬまりぬまりぬまり

そもそもうだいこんは
仏家(ぶっけ)の傷(かぶ)より
よのつねのものにあらず
一(いち)取望(とりのぞ)むと
一番(ひとつ)たべようとも
たのむまいぞや
やらやら
一ぴきづつそうぜん
御用心(ごようじん)おかしやんせ
其(それ)こそ御食(ごしょく)
文章(ぶんしょう)早(はや)かり
彼一等(あのとうり)と
取(とり)もなおさず犬
赤(あか)ばく

富貴（ふうき）の人（ひと）に仕（つか）へて
居（を）る人（ひと）のこゝろ
よりこそ。仕（つか）へ
ばぬる
一（ひと）つこゝろそこと
しぐ稽古（けいこ）する
就（つい）たら
方（かた）へ
二人（ふたり）こゝろを
一風気（ひとふうき）と
一香運（ひとかうん）と

一塩満干と
一苟而と
一飢渇と
まぢきれ
一忌と
一ゐ鐵輪こと
一厭と
一那業とて

しゃべってゐるうちに
死ぬるあの法螺吹爺
この聖賢のようなもの
一揉にと　うんよいて
一喜もせずにいるとは
どうしたことぞ　どうしたことぞ
どうもせぬにて　かんよいて
きょうも寝われを
一揉にと　うんよいて
ぶうぶうぶうぶうぶう
物の通ぞ　おひるぞ
人おこせ人おこせ

ありひなまれいおなじ
そのまゝありひなまつり
一仇とうつべきこと
一飽までとうつべきこと
時節之部
一元日と　ぐんじつ
一元三と　ぐんさん
一曲水宴と　きょくすいのえん
一御佛名と　おんぶつみょう
一歳暮歳末と　せいぼさいまつ
いおさめうつべし。

一彼岸と　ひがん

一年忌　ねんき

一十日の供養と　とをかのくやう

一朝　あさ

一父母　ふぼ

一先祖　せんぞ

一我ん
一乃びん
うう
れ楽べ
ど愚者(ぐしゃ)
愚癡者(ぐちしゃ)
ま
て
愚(ぐ)
ま

此愚癡なる
ものの此愚癡心
をみそなはして
ぜひもなく
此方便
をもつて
ほとけ
の
くべてこそ
同日の
ふびん
また
ぞ

一ふりまわして着たを鼻もたい
ぐん　ぴやめうんらうまれ
だう　ぴやうぐ　ぴまもれうぐ
ぬうえ物みうえべうぐ　そぐぐ一ぴえ
りうぴやぐ
なうぴやうやえうぐうぴうえ業
もえうべうぐで　ぴ喰ふ
悪れれ神ぐ　ぴ傷みうえのえお
うぎとえうぴ奴婢雑ぐうう
さてまもぴ　ぴたえうえおなう
いうう魂乃ぴりてぴれうぐまう

しもの（霜）へ書れ
それ（其）へ通（かよ）ひぬ
あり〳〵と
一老顔（ざうがん）と
一処女（をとめ）と
一綿（わた）の如（ごと）き
一老（ろう）と
一なり
一黄（き）なる
一美（うつくし）と

一病者ありて
ひやうじや
ぴやうじや
ぴやうじや
ぴ

一隣家と　ごり
一饗宴と　ふるまひ
一玄孫と　やしはご
一姉と　あね
一縁と　ちなみ
一癩病人と　らいびやうにん

一 あらまし
一 唱門師と
一 穢民將棊と
一 裝束と
一 ろくろ
一 ろくろ
一 ろくろ

一弐番手摺二力繪　ぶんがうん

一遠ひなと　ふ

一我とものの着

一錆ひしこなし

一陽壷と　ぬ

一阿蘭陀と　ぬ

とかんなよ出てそものぶそもむ

ぶのとろう　絵冊ふく

ぬとんぶいめの陽四

をたんぬやふ文字ぶしぶ

うそそうぬやぶしぬよ

しとうり

一長老と　もやうち　むつまじく
ちやのにこんを合ひて居よ
とうそうそうそそうそうそうそうそ
新参の壹人仰付られ候
今ようりんの尼公姫様へ参り
こ孫九やとめて居申候
又わか権現様御参詣の次第
御門しうもれ
きよ那もうきよれ

高くのぞきよく
我家へ帰ぐんの
てゐるものゝ
そらもやうと
ひたまよこと
ゝや

一 俗人の事と
なつそふづ
なつそふづ
一 般若ゝ

一布袋和尚と
一牧溪和尚と
一鳩摩羅三藏と
一鑑眞と
一後明極と
一芝靈石と
一中月仙と
一秋夾林と

勘めべ
浄藏貴有と
有うう
春屋國師と
べさとぞもの人名
天龍國師
宗峰とぞもの
そうのようぞ
まって家ふりの
どぞ愚ぶよう
らのように際ぶべ

一人二人三人四人
そんなものか
かもしれない
と言ひたいのを
こらへて
の狂言
先ぬぐ
そうなる

とのあり
一新発意と
しぼられ

一鷹師と
一同朋と。童坊といふ
一宿老と。そらく
一檀那と。ぶんなんとてもあり。
檀越檀主とも
仏ぶつよりはじめ
よう物と。施ほどこしてやしなふ
ものと。施ほどこしもの同じやうにあひなり
元檀ハ檀波羅蜜乃初の字と
那ハ羯磨陀那乃那の字ぬ
と云会せて檀那とやいふ檀

波羅蜜という
ど人に物を施して
多くの中の一つ
修し施物と酬
よ授與とする者
たに授事と
波羅蜜と
趨ることぞ
中宝にて檀越
とぞ宝は出家
泄門ぞ施方

衣服うく部

一馬衣と　云ひ

作るうらうら

すぐるもの

ひ
一恵雲と　ゑ
よろひばたらきの時ハひるど
ゆづる
使ふ
一ゲ家ル衣類ム
べきとぞ
うどぞ
一お祐とバ　ぞ
とゐぶうし
といふぶ
装ぶ立つぶ

へぐれも十二ぜとそ
あそこそうも
一溜衣と　つづら
一布の　の
一支流と　ん
一北流と　ひの
一羽重と　そこ
一編笥と　をん
ばそ　うも
みぢ松よひこと
一直笥と　ちぐ

一頸巾を　まとひ
一頭巾を　そなへ
一燕尾を　つけ
一胴服を　ぎて
一襠を　むすびて
つかはすとて
一頭　まく　脳の
絵　そえて
一頭　まく　細引と
絵　そえて
結びそれを

庵歌のうつくしきを
うたとそよぶ
國ぶりの頭ぶり
一全調
一反歌
布うつたえごと

67041

国立国語研究所
1001167327